

---

**ナギ**

karon

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ナギ

### 【Nコード】

N5779Y

### 【作者名】

karon

### 【あらすじ】

すなごりびとに混じり、船乗りの修行をするナギ。

船乗りはいつか遠くに旅立つ。その日のために孤独な修行に耐える。

古代の海辺の村で、もしかしたらあったかもしれない物語。

## 祭りの終わったその後(前書き)

長らくほうつておいた書きかけ小説です。そういつわけで、更新は遅いでしょう。それでもいいとおっしゃってください。気の長い方大歓迎。

## 祭りの終わったその後

鳥の鳴き声でナギは目を覚ました。細い講師の隙間から、日差しが目を差し、まぶしさに目を細めた。

藁の中から這い出して、講師を結わえた紐を解く。

まだ、藁の上に寝そべるほかの子供たちもそろそろ起きだしてくるだろう。

肩にかかる黒髪を書き上げて、太陽を見上げる。

陽はさして高く上ってはいない。さほど寝過ごしたわけではないようだ。

ナギの住まうすなどりびとの里は山のやや中腹より下にある。

おじじがすでに起きていた。おじじは船を降りた船乗りだ。

船乗りと、すなどりびとは違う。すなどりびとは生きる限りここにいるが、船乗りは遠くに行ってしまう。帰ってくることはほとんどない。

だからここにいる船乗りはおじじだけだった。

昨日祭りが終わった。ナギがとても楽しみにしていた祭りが。

どこか白々とした気持ちで、おじじの元に歩み寄った。

おじじは白いものが混じるまだらな頭を向けてナギを見た。

「腹が減ったのか、なら、土はこの女衆おんなじのところにいけ、何かしら、もらえらるう」

ナギは無言で肯いた。

## 祭りの終わったその後2

ナギは山をあがり、本当の中腹へ向かう。

土の女衆はどこにでもいる。そこが山であれば。土の生える植物、土に住む小さい生き物、土そのものすら土の女衆の獲物だ。

文字通り、土に張り付いた女たちだった。

獲物を加工し、食べ物を調達し、またさまざまな器具を作り、この地に住まう人間の生命線とも言える女たちだった。

土鍋をかき回していた女衆が顔を上げた。

木の椀に中身を掬うと無言でナギに渡した。

「明日、貝を採りに行く」

ナギがそう言うと女衆は頷いた。

日が当たるとナギの額に刻まれた三本の波線がちりちりとうずいた。

里によって刻まれる文様は違う。

ナギはすなどりびとに招かれた日にその文様を刻まれた。

それはもうナギが土の女衆にはならないことを意味していた。

土の女衆だけが、文様を持っていないのだ。

その日、ナギは船乗りになることを決定付けられた。

木の実をくたくたに煮込んだ椀の中身を啜っていると、笑いさざめく少女たちの声がした。

椀の端を啜えて、ナギは眉をしかめた。

数人の少女が、木々をぬけて現れた。

その少女たちは、ナギとも、土の女衆とも違っていた。

背の半ばまである長い髪。白い長衣をまとい、肌は白く滑らかだ。その中で、ひときわ背の高い少女が、目ざとくしゃがみこんでいたナギを見つけた。

ああ、嫌な奴が来たとなギはそっぽを向いたまま汁を啜っていた。

「ナギ、今日は何を持ってきたの」

少女は尊大に尋ねた。

その少女は何も持っていない。背後の少女たちが荷物を助け合うように持っている。

「あたしは明日持つてくるんだ」

ふんと鼻で笑うと少女たちをあごで使いながらナギを見据える。

少女たちは木の皮で編んだ籠を下ろした。籠には、布と紐が摘みである。女衆はその籠を受け取ると、あらかじめ用意してあった別の籠を少女たちに渡す。

芋と、様々な木の実の入った籠を少女たちは重そうに下げた。

背の高い少女は何も持たない。何故なら、持つことができないからだ。

人差し指から中指まで長く伸びた爪のため、その手を握り締めることすらできないからだ。

だから、籠をつかむことなどできないのだ。

「明日は、明日で、何か食べるんだろう、今日食う分はただ食いだねえ」

「一度に、二食分くらい取れるときもあるんだ」

「へえ、それはそれは」

「大体お前にそんなことが言えるのか、その布だつて、編みあがるのにどれほどかかる、布を持ってこなければ、食い物をもらえないならお前はとくに飢えて死んでいるだろう」

「ナギ、やめよ」

女氏の一人が二人の間に割つて入った。

「オル八が悪いんだ」

自分だけ責めるのかと、ナギが食つて掛かる。しかしそれをさえぎつて、女衆は言葉を続ける。

「いい加減におし、二人とも、我等はお前たちの働きをそれぞれ認めている。その上で与えるべきものを与えているのだ。二人ともおやめ、お前たちは、子供だ、どの里の子であろうとも、子供は養わねばならぬ、それが、土の女衆の努めぞ」

暗に半人前とほのめかされ、二人は同時に、目を険しくさせた。

「いいからおやめ、二人とも里に帰りなさい」

オルハは悔しげに、背後にいる少女たちを引き連れて背を翻した。ナギは急いで、手の中の腕を空にして、あわててそれを返し、自分の場所へと帰ることにした。

ナギが帰る途中、ナギの後から起きてきた仲間とすれ違った。

彼らは一様に、ナギから目を逸らす。

ナギはすなどりびではないから、ナギは船乗りだから。

誰もが、ナギによそよそしい。マツリが終わって去っていった人たち、たった昨日の事なのに、もう恋しいと思う。

じりじりと陽が照り始めた中、ナギは茫然と立ち尽くす。

### 祭りの終わったその後③

ナギも、他の子供たちも、毎日船に乗るわけではない。

浜や岩場で籠を片手に、採集に励む日もある。

ようやく背の立つくらいに深さで、海中に潜り貝を集める。

ナギは背後の陸を眺めた。

まるで自分は海の女衆だなど、そんなことを考えて、苦く笑う。

この近辺で、こんな仕事をしている女はナギ一人だ。

サザエは、岩のところにいるのが美味しい。砂のところのサザエは不味い。

そう呟いて、水中深く潜った。

籠の中がある程度重くなったら、濡れた体のまま他のすなどりびとのところに持っていった。

魚も骨を取り除いたら、しばらく海水につけた後、干し上げてしまふ。

あさりや蛤は、甕に入れて、海水の上澄みを満たした中で砂を吐かせてから殻をはずし、干しあげる。

ここ数日は天気が良いと判断され、魚も獲ったはしから捌いて干しあげる作業が続いている。

夏と秋の間にて獲れるものは獲れるだけとって、塩漬けにしたり干し上げて保存状態をよくし、冬に備えなければならぬ。

だから、夏と秋は忙しい、それが、少しだけ、ナギは救いだと思っただ。

ナギより年長の少年たちが、貝を殻からはずしている。

それより、さらに年長の少年が、ナギに籠を渡した。

その籠には、魚の中骨が大量に入っていた。

びしょ濡れだが、かまうものかと軽く両手で髪を絞り、籠を手に上に登っていく。

すぐに、草を刈る土の女衆を見つけ、籠を渡そうとした。

しかし、今手が離せないから、他のものに渡してくれと言われ、おじじと同じくらいに老いた女衆に籠を渡すことにした。

「濡れたままじゃないか」

そう言つて、ナギの口に自分の籠に入っていた小さな木の実を放り込んでから女衆はナギをそう咎めた。

「早く乾かしな」

「どうせまた、海に入るからいい」

ナギはそつぽを向いて答えた。

「髪が痛むぞ」

「別にいい」

嘆かわしいといわんばかりに、女衆はため息をつく。

女衆は常に、土にまみれ身を粉にして働いているが、それは、いつも昼間だけだ。

夜になれば髪をくしけずり、簪や櫛で身を飾り、丹でその顔を彩る。

それは、ナギの額に刻まれた文様とはまったく趣を異なる女の化粧。

昼とは異なる異形の顔。

そうした女達は、大人のすなどりびとや、山の男衆にしなだれかかり、かいがいしく世話を焼き、そしていつしか、闇の中に消える。

そんな女衆を、ナギはいつもどこか薄気味悪く思っていた。

「あたしは船乗りになるから、おんなじじゃないもん」

ナギがそういえば、女は虚を衝かれた顔で、しばらくぼかんと、ナギの顔を見ていたが、苦笑して、ぽんぽんと、ナギの頭をたたいた。「どこの女でも同じ、海だろうが織だろうが土だろうが、女のすることになりなんぞない」

「何だ、それは」

「子供にやわからん、わからんでいい。そのうち、わかるからな」

山の男衆は常に来るわけではない。はるか向こうの山を越えてやってくる、鹿やウサギの死骸を持って。

それらは、皮をはぎ、肉を干し、骨を煮立てて芋や木の実を煮る。  
いつもと同じ仕事だ。

#### 祭りの終わったその後 4

ナギは海から上がると、川に向かう。川で肌や髪に染み付いた塩を洗い流すためだ。

川で濯がねば、塩が肌に吹いて不快だからだ。

濡れた服を絞り、髪を風に任せて乾かしていると、よたよたと歩いてくる男がいた。

蓬髪は、乱れ衣服はほつれ毛羽立っている。しかし何よりその男が異様なのは、恐ろしく背が高く。そして髪は血のように赤い。

エビスだ。

海から流れ来た男。そして今は土の女衆に飼われている男。

エビスが、何をして女衆に養ってもらっているかナギは知らない。しかし、エビスによく似た子供が、ちらほらと生まれ始めている。

その子供達は、髪が赤く、瞳も赤い。

エビスの目は、空色をしているのに。

ナギはエビスがおそろしかった。いつも虚ろな目をしている恵比寿が、ナギを見るとときだけおそろしい目になる。

突き刺すようなおそろしい目。

ナギは、後ずさりすると逃げた。

エビスの呻き声が聞こえた。エビスは言葉がしゃべれない。わけのわからないわめき声が、意味の分からない呟き。ふとナギはそれがエビスの言葉なのかもしれないと思った。

エビスの言葉はナギの言葉とは違うのかもしれないと。

おじじが、ナギを迎えに来てくれた。なぎの様子を見て、眉をひそめる。

「何があった？」

「エビスを見た」

おじじはどこか納得したような、どこか切ないような顔をした。

「ナギはエビスがおそろしいか」

ナギが小さく頷くとおじじはぼんぼんとナギの頭を撫でる。

「だが、エビスはおじじの仲間じゃ」

そう言われて、ナギは、不思議そうにおじじを見上げた。

「わしと同じく、エビスも船を降りた船乗りじゃからな」

ナギは、おじじの腹に抱きついた。

「いや同じじゃないな、わしは船を下りた、エビスは船を取り上げられた」

おじじの声はどこまでも苦い。

「同じ船乗りじゃ、おそれるな、おそれてくれるな」

ぼんぼんと何度もナギの頭を叩く。

二人は寄り添って、寢床に帰る。

ナギは、目を伏せて、山を登っていった。

そしておじじのいつていることを考えた。恵比寿が船乗りならどうして印がないのだろう。

今では、おじじと二人だけになってしまった額の印を指でなぞる。

印は絶対だ。一度決まればけすことはできず取り消すこともできない。

ナギのほかの子供にはすなどりびとの印がある。

ナギはすなどりびとにはならない。他の子供も船乗りにならない。

それが当たり前だったはずだ。

それにエビスは仲間じゃない。エビスはナギを睨むだけだ。

いつだってあの不思議な空色の目でナギを憎憎しげに。

何故エビスはナギだけを憎むのだろう。

ナギにはわからない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5779y/>

---

ナギ

2011年11月24日19時47分発行